

POLESTAR Writing Courseの改訂

南出 康世

POLESTAR Writing Course が誕生したのは平成7年である。そしてこの10年の間に、現場の先生の高い評価を受けて常にトップクラスの位置を占めるライティング教科書に成長した。今回の主な改訂点は、「はじめに一英語の発想と日本語の発想」に「可算・不可算名詞」と「総称的・特定」のページを加え、練習問題を4ページ増やして「はじめに」を充実し、さらにネイティブスピーカーの協力を得て、本書全体の用例を再吟味し、語法の解説をより正確にわかりやすくしたことである。

さて、本書が編集方針としているコミュニケーションのためのライティングの3本柱とすべきものは「文法上の正確さ」、「文脈上の適切さ」「テキスト上の結束性」の3つである。

1. 文法上の正確さ (grammatical correctness)

コミュニケーションを目的としたライティングにはその前提条件として、英語の文法・構文に関する知識が不可欠である。この文法的知識を運用の段階にまで高め、「文法的に正確な」(grammatically correct) 文章を書く能力を養成するのが **Part 1「発信型ライティングのための構文と表現」**の目的である。ただ文法のまとめを提供するにしても、複文とか不定詞の用法とかいった文法項目を全面に出すのではなく、目的、原因、理由、結果、使役、比較、譲歩といった概念別、表現別の構成にしてある。

2. 文脈上の適切さ (contextual appropriateness)

われわれは何かを言うとき必ず何らかの行為(act) を遂行している。たとえば、Will you open the window? と言えば「依頼する」という行為を果たしている。このような行為を果たそうとする場合文法的に正確な文を言えるだけでは、コミュニケーションのための手段としては不十分である。たとえば目上の人に手紙で何かを依頼する場合、Will you...?

は横柄な感じで相手に失礼で文脈上適切でない。このように感謝、謝罪、許可、禁止、義務、依頼、忠告、確信、同意といった行為が遂行される日常のコミュニケーションの場では、「文脈上適切な」(contextually appropriate) 表現が要求される。このように、発話において謝罪、禁止、依頼、命令といった行為を果たすことを言語の「機能」(function) と呼ぶが、これを学ぶのが **Part 2「インタラクティブに書くための機能表現」** である。

3. テキスト上の結束性 (textual coherence)

英語ではしばしばパラグラフの冒頭に主題文が来て、その主題を支持する文がいくつか来て、最後にまとめ文が来るという構造をとることが多い。生徒の書く英語の文章もこの基本的な展開と構造に合うよう指導する必要がある。すなわち、それは「テキスト的に結束した」(textually coherent) ものでなければならない。いかに個々の文が文法的に正しく、文脈に適切であっても、テキストとしての結束性に欠けていればコミュニケーションを目的としたライティングに高い評価を与えることができない。この段階では、今までの文法(sentence grammar)のレベルで捉えていたもの、たとえば、語順、態、接続詞、接続副詞などを談話レベルから捉え直し、これらがテキストの結束性にどのような形で寄与しているかを理解するための練習など新たな指導がさまざまな面で必要となる。この役割を果たすのが **Part 3「パラグラフ・ライティング」** である。この章ではモデル文2つを変更して、シンガポールの言語問題など新鮮なトピックを提供した。

ビジュアル時代に備えて全ページ4色カラーにした。内容と体裁がさらに充実した *Revised POLESTAR Writing Course* をよろしく願ひ申し上げる次第です。

(大阪女子大学名誉教授)